

◎小学生の部

太田玉茗賞

家ぞくの音

羽生北小学校 三年

亀田 健介

ぼくの家ぞくは六人家ぞく
かっこよくて強い パパ
りょう理上手な ママ
いつも元気な 妹
物知りはかせの おじいちゃん
やさしくてかわいい おばあちゃん
そして
くいしんぼうの ぼく

ワハハー！ワハハー！
ドタドタ！バツタン！
コラー！！
毎日いろいろな音が聞こえる

大きい音
小さい音
おもしろい音
毎日 聞こえる家ぞくの音
ぼくは そんな家ぞくの音が
大好き
音の数だけ家ぞくの幸せがある
これからも
たくさん聞きたい 家ぞくの音
たくさん出そう 家ぞくの音
家ぞく六人
幸せの音を出そう
ぼくの家ぞくは
「幸せの音」とくらしている

宮澤章二賞

ひまわり

新郷第二小学校 一年

堤 澄心

おおきな おおきな
ひまわりをみたくて
ちいさな ちいさな
たねをまいた
かわいたつちにみずをやる
あつというまにすいこんだ
ゴクン、ゴクンと
のんでるみたい
わたしのせをおいこして
どんどんおおきくなっていく
まっすぐのびたふといくき
てのひらよりおおきなは
きいろのはなびら
ひらひらさせて
ぎらぎらたいようと

にらめっこ
ともだちといっしょに
ひまわりをみあげた
「まぶしいね。」
「うん、まぶしいね。」
ふたりでわらった
ともだちのえがおが
ひまわりのようにみえた

優秀賞

ザリガニつり

井泉小学校 二年

江原 蓮

どこにいるかなあ。
何びきつれるかなあ。
さおにエサをつけた。
にごって見えない。
よう水をのぞいた。
おや、あわがたっているぞ。
いたっ！
そおっと。そおっと…。
エサを近づけた。
すぐにザリガニはエサをつかんだ。
ぐいぐい。ぐいぐい。
さおがひっぱられる。
わたしもまけずに、ぐいぐいひっぱった。
それっ！
わあ大きいぞ。
バシヤバシヤ。あばれるザリガニ。

ゆびがはさまれそうだ。
こわくてもてない。
かたつぽのはさみで、ちゅうぶらりん。
ジャボン。
しまった。
ザリガニがにげた。
こんどはまけないぞ。
もう一どしようぶだ。

元気になったじいちゃん

須影小学校 四年

清水 健太

十月二十八日

じいちゃんの誕生日
じいちゃんは家にいない
左足が動かなくなつて
病院に行ったら
脳を手術することになった

じいちゃん 頭がいたいかな
ばあちゃんはさみしくないかな
じいちゃんに会いたいよ
ぼくは 熱が出てしまった

じいちゃんは
図工で使う木を切ってくれた
じいちゃんは
ぼくの食事の世話をしてくれた
じいちゃんに会いたいよ

もう一週間も会ってないんだよ
写真じゃなくて
本物のじいちゃんがいいよ

お母さんが言った

「じいちゃんは

健太に早く会いたくて

傷が早く治ったみたいよ」

「本当？ 神様、ありがとう」

走つて

じいちゃんのところへ行つた

じいちゃんがわらつてすわつていた

じいちゃんが

「健太がおみまいに来てくれたのが

一番うれしかったよ」

と言つた

じいちゃんが元気であること

それが幸せ

父との楽しい時間

新郷第一小学校 五年

富岡 俊貴

「おいキャッチボールするぞ」

父は、グローブと硬球ボールを両手に持つて、ぼくに声をかける

「そら、いくぞー」

父の大きなかけ声

まずは、

やさしく投げってくる

段々と強く投げってくる

「ここに投げろ」

胸にめがけて、思いつ切り投げる

バシーンと心地よい音がする

投げる、捕る

投げる、捕る

ただそれだけの繰り返し

ただそれだけだけれど

少し気がゆるむとすっぱぬけて

ワンバウンドする

一球一球に気持ちをこめて投げると

バシッと決まる

じっと見つめると

父の真つ白い歯が見えて

にこつとぼくを見てわらう

「良くやったぞ」

と、ほめてくれる

ぼくは、うれしくなって

何回も投げる

うまくなりたい

もっと強くなりたい

父とぼくだけの大切な大切な

楽しい時間

佳作

いっしょ

手子林小学校 五年

猪股 楓花

朝、学校に行く

「ねむいな」と思いながら歩く

とちゆう、左右の道から手子林の生徒が一

本の道に集まる

黄色い頭とランドセルがいっぱい

アリの行列みたい

これを見るとおもしろくて元気になる

夏の暑い日、学校からの帰り道

ランドセルが重いしガタガタなる

あせがダラダラ

でも友だちがいっしょだから楽しくて元気

になる

いっぱい、おしゃべりするからだ

冬の寒い日、学校からの帰り道

ランドセルが重くて肩がいたくなる

手がつめたくて寒い

でも友だちがいっしょだから楽しくて元気

になる

いっぱい、ふざけたりするからだ

ひとりだと大変な登下校

友だちといっしょだと楽しくて元気になる

だから、ずっといっしょがいいなと思う

ぼくらの利根川

村君小学校 五年

志賀 聖

ラフティンググボートに乗って
ぼく達は パドルをにぎる
イチニー イチニー
誰かが おしてるみたいに
ボートは どんどん進む
ぼくの心は波に乗る

手を休めて「ボー」つとしてると
川の流れが変わった
グルグル グルグル
ぼくのきん張は高まっていく
ボートは 波にまかせて回りだす
遠くに 不思議な波が見えてきた
近づいていくと
バシヤン バシヤン
川の友達の元気なジャンプ
ハクレン達のおでむかえ

おどろいたぼくは
君達から 目がはなせない
なんだか うれしい
「今年も会えたね ハクレン君」

川は
君とぼくらをつなぐ宝物

やさしい力で ぼくらを運び
いろんな景色を見せてくれる

「ありがとう」
また一つ 思い出が増えたよ

たんぼ

新郷第二小学校 一年

中津 ひかり

わたしのいえのちかくには
たんぼがある
五月になると
たんぼに水がたくさんはいつて
みずうみみたい
たいようのひかりで
きらきらまぶしい
よるにはかえるのだいがっしょう
とても大きなうたごえで
おんがくのじゅぎょうなのかな
あきになるとむしたちが
だいがっそう
たんぼのいねが
みどりからきいろになる
いねのほがおじぎして
かぜにゆれるといいにおい
わたしはかえるもむしもたんぼも大すき
きつとかえるとむしも
たんぼがだいすきなんだろうな

夏のオーケストラ

新郷第二小学校 四年

西村 風香

ケロ ケロ ケロ。

夏の夜になると、いっせいにひびくこのが
つしよう。

小さなおたまじゃくしが、いつの間にか手
足の生えた一人前のカエル君に。

体は小さくても、お父さん、お母さんカエ
ルに負けないよ。

ケロ ケロ ケロ。

何百、何千ものカエル君。

君達のがつしようは田んぼのみなもにひび
きわたり、大音きょうのオーケストラ。

私のお父さんはお母さんと結こんする前、
山に囲まれた所に住んでいた。

私の町のような田んぼは、全然まわりにな
いんだって。

羽生に住んだ最初の夏、カエル君のオーケ
ストラに、かなりびっくりしたそうさ。

「うるさすぎてねむれない。」

失礼な事を言ったそうさ。

そんな事もだいぶまえ。

今では夏のメロデーさ。

カエル君達のオーケストラ。

君達の歌声をきいた時、今年も羽生に、暑
い夏がやってきたと思うんだよ。

かんべえ松

新郷第一小学校 三年

宮田 綾乃

家の近くのなみき道は

かんべえ松といわれている

むかし かんべえさんが

「通る人がにこやかにすごせるように」と
うえたという

今では

その時の松は一本だけになってしまった

きよ年

六年生のお兄さんお姉さんたちが

松をうえていた

小さくてわたしのひざくらいの子どもの松

わたしは通るたびに

「早く大きくなあれ」

と思っている

かんべえさんも 毎日

「早く大きくなれ」

と違ってせわをしていたのかな

六年生がうえた松
百年後にはどのくらい大きくなっているの
かな
通る人がにこやかになってくれると
わたしもうれしいな

その他の良い作品

題	学校名・学年	氏名
緑のカーテン	岩瀬小学校 五年	伊藤 杏
川俣小学校大すき	川俣小学校 二年	大澤 修良登
わたしとみかんの木	新郷第一小学校 三年	梶田 暖乃
すずかけの木	新郷第二小学校 三年	小磯 里奈
勘兵衛松	新郷第一小学校 五年	田中 瞭子
地蔵祭りの日	新郷第二小学校 五年	塚田 聖悟
てんのうさま祭り	羽生南小学校 五年	都築 健太
あいぞめたいけん	須影小学校 一年	藤井 萌恵

◎中学生の部

太田玉茗賞

ふるさとのおい

西中学校 一年

宮崎 大歩

「ヤーツ、メイン」

今日も暑い、中学校の体育館

小学三年生から習っている剣道

「剣道の道着や袴には藍染めが使われているんだよ」

剣道の先生がこんなことをおっしゃっていたことを思い出す

剣道と羽生の文化の藍染め

身近なところでつながっていることに感動
藍染めには虫をよける効果があるという

「昔の人はよく考えたものだな」と僕は思った

「ふるさとのおい」

普段は汗びっしょりの道着だけど
藍染めのおいをそう感じる夏の日
ふるさとには僕の身近なところにあった

宮澤章二賞

お盆さま

南中学校 一年

伊藤 響起

毎年、

お盆になると思い出すことがある。

夏のとて暑い日だった。

家族みんなでお墓まで歩いて行った。

みんな汗びっしょりだった。

お墓についた。

お供えものをしたり、

お線香をあげたりした。

ばあちゃんが手を合わせ

「さあ、一緒に帰ろうね…。」

と、お墓に話しかけた。

僕は不思議に思った。

「一緒に帰る、ってどういうこと？」

ばあちゃんは、

「一年に一度、

亡くなった人の魂が家に帰ってくる、

それがお盆なんだよ。

家族みんなでお墓まで迎えに来てもらって、

きつとご先祖様も喜んでるね。」

と、優しく教えてくれた。

家に帰ってお線香をあげた。

「どこにいるんだろう？」

僕はキョロキョロ見まわした。

「魂は見えないよ。」

ばあちゃんが

笑いながら言った。

今年も、

家族でお墓まで迎えにいった。

「おかえりなさい。

ゆっくりして行ってね。」

僕は、

心の中でそうつぶやいた。

優秀賞

節電の夏

西中学校 一年

川島 幸也

ミーン ミーン ミーン
今年も暑い夏がやってきた
でも・・・
いつもと違う節電の夏

嬉しいみりのある緑のカーテン
さわやかな風を感じるすだれ
耳にやさしい風りんの音

いつの間にか
扇風機の前に家族があつまる
そして隣家から聞こえる笑い声
ふいに「なつかしい」と母が言う
子どもの頃縁側に兄弟ならんで

食べたスイカ
かやの中で川の字で寝た夜

今、ふるさとを遠く
離れなければいけない人が多くいる
ぼくはふるさとで過ごせるこの毎日に
感謝したい
そしてこのふるさとをこれからも
大事に守っていかうと思う

サケの放流

西中学校 一年

野口 雅史

サケの小さな卵を、
小学校の時にもらって来た。
それは、まるでルビーのように、
きれいなオレンジ色をしていた。

黒いちっぽけな目は、
すけた卵からこちらを見ていた。
「生まれた川底と同じだろう？」
水そうを暗くして、大切に育てた。

ふ化したばかりのサケ達は、
ほとんど動かず、ぼくを心配させた。
「死んじゃったのかな。」
いきなり泳ぎ出し、ぼくは安心した。

寒い冬休みの間、
小さな六つの命は確実に育った。
キラキラと体が美しくかがやくころ、
放流の日をむかえた。

同じように育てた生徒達と、
見慣れた利根川に放流した。
みんな、なごりおしそうにお別れした。
「ち魚達、元気でね。」

あれから、半年。
今ごろは、真っ青で広大な太平洋を、
仲間と泳いでいるのかな。
他の魚とかに食べられていないかな。

「またもどって来いよ。」
考えてみると、ぼく達も同じかな。
ここ羽生で生まれ育ち、
いつの日か、この地にもどる。

やっぱり、ふるさどが一番。

ふるさとの道

西中学校 二年

渡邊 南帆

ふるさとがなくなつたと泣く老人
その視線の先には震災後の風景が広がる
田畑の緑は消え、住宅の姿も見えない
どんなに辛いだろう
だけども心が落ち着いたら思い出して
あの青い空と雄大な山
波の音、畑を飛び交う鳥の声
お互いを支え合う人々の温かさ
かたちは変わってしまったけれど
歩んできたあなたの道が、すべてふるさと

そして今 十四才の私
ゆったりと流れる利根川
真夏の太陽の下、豊かな自然で実る野菜
家族、友達、先生の笑顔
そのすべてが私のふるさと
でも、まだまだこれから！
様々なものを見て、感じて、感じて
私のふるさとの道を広げて行こう

老人の涙から改めて感じたふるさと
ふるさとの大切さを、私は教わった
人を思う心で絆は深まる
ふるさとを思う心で道はつながっていく
そう私は信じている

佳作

朝の景色

西中学校 一年

石井 遥

夏休み中早起きした日だけ走った田んぼ道
走ってつかれるけど
ひんやりした優しい風が
つかれたわたしの背中を押してくれる
走りながら考え事をしてしていると
きれいな朝日が解決してくれる
一人で走っていて不安になると
鳥達が歌ってはげましてくれ
上をむいて走っていると
きれいな青空が見える
いつも見ている田んぼを見ていたら
まるで
緑色のじゅうたんが広がっているように
見えた
また来年もこの美しい景色が
見られるといいなあ：
とわたしは思った

通学路のあなた

西中学校 三年

蓮見 世奈

夏休み
宿題をしながら
ふと思いつく

通学路の
アスファルトの割れ目から
顔をのぞかせた小さい芽
毎日毎日少しずつ
頑張って伸びていく

友達に会うように
毎日会っていたのに：
元気に伸びていくのが
うれしかったのに：
心の中で

「おはよう！」「頑張れっ！」
って声をかけていたのに：

——一週間も会っていない！

急いで自転車を走らせる

すっかり背が伸びて
黄色の花を咲かせて
あなたは静かにそこにいた

よかった——
じっと見つめていたら
今度は私に
「頑張ってる！」
って言っている気がした。

うちの庭の太陽

西中学校 一年

森田 真央

せみの声がジリジリとひびく
太陽がジリジリとふりそそぐ
夏まつさかりの今
今年もうちの庭にひまわりがさいた

黄色い小さな花びらと
まん中にたつくさんある種たち
そんな太陽みたいな花
あんなに小さい種だったのに
あんなに小さい芽だったのに
いつのまにか自分の背をこしている
空にかかぶ本物の太陽が
うちの庭の黄色い太陽を
ぐんぐん育てていったんだ

夏休みが終わりを告げるころ
ひまわりはだんだんしおれてくる
明るかった黄色い花も

だんだん茶色くなっていった

二学期になると

ひまわりの花は

地面にたおれていた

太陽みたいなキラキラした明るい光も

もう放っていなかった

空を見上げると

庭の太陽を育ててくれたお母さんも

いなくなっていた

そんな中、花だんの中に

小さな小さなつぶがおちている

それはひまわりの赤ちゃんたちだった

次の夏休み

赤ちゃんたちをそつと土の中に

いれてあげた

また私の背をこせるかな？

「うちの庭にまた太陽をさかせてね。
まってるよ。」

あたり前の大切さ

東中学校 一年

横田 結香

三月十一日 東日本大震災
歴史に残るほど大きな地震だった

羽生市は震度5弱
あんな大きな地震は初めての経験
とてもこわかった

学校の帰り道
屋根瓦やへいがくずれた家を見た
羽生市にも少なからず被害があった

東北の人達はふるさとを一瞬にして失くした
今でも愛しいふるさとに帰れない人が多くいる
そんな人達の事を考えると心が痛む
一刻も早く元のふるさとへ

その願いを実現するため
私達に託されたミッション
節電 募金 ボランティア：
考えればもつとたくさんあるだろう
これからもできる事には積極的に取り組みたい

節電で気付いた事がある
エアコンを切って窓を開けた
青々とした水田を渡った爽やかな風が吹いた
電気を切って夕涼みに出かけた
久々に見る月の光がとても明るかった
停電した時
家族でキャンドルを囲んだ
みんなで過ごす貴重な時間
テレビもつかない
けれど会話が楽しい
心温まる時間
あたり前のように過ぎていく時間
今ここに私がいる事
地震が気付かせてくれた
忘れかけていた感謝の心
一生忘れない出来事

ふるさとの音

南中学校 二年

渡邊 可南子

今年の夏は暑い
けれど節電の夏
クーラーは控え目の二十九度
でも十分涼しいことを発見

節電のため
見てもいないのに一日中ついている
テレビを消してみる
すると
夏らしいセミの声
近所で遊ぶ子供達の声
十二時を知らせるチャイム
熱中症に注意との町内放送
雷鳴

そうか
これは「ふるさとの音」
節電の夏じゃなければ

聞こえなかった
ふるさとの音

電気代は減ったけれど
心には暑い夏の音
故郷の音を残した

東北にも響いているだろうか
この音は
私たちも
できる限りのことをします

だから
東北に故郷の音が戻る日まで
負けるな日本！
頑張れ日本！

その他の良い作品

題	学校名・学年	氏名
祖母の田舎料理	西中学校 二年	穠山 遥名
道	東中学校 二年	栗原 智哉
土手	西中学校 三年	近藤 由佳
ムジナモの花	東中学校 三年	関口 明莉
夏の思い出	西中学校 二年	谷 美祈
羽生弁	南中学校 二年	中村 彩里